埼玉大学紀要（教養学部）第48巻第１号　2012年

燕鉄器の東方展開

Ironware Diffusion in the east of Yan

中　村　大　介*

序論

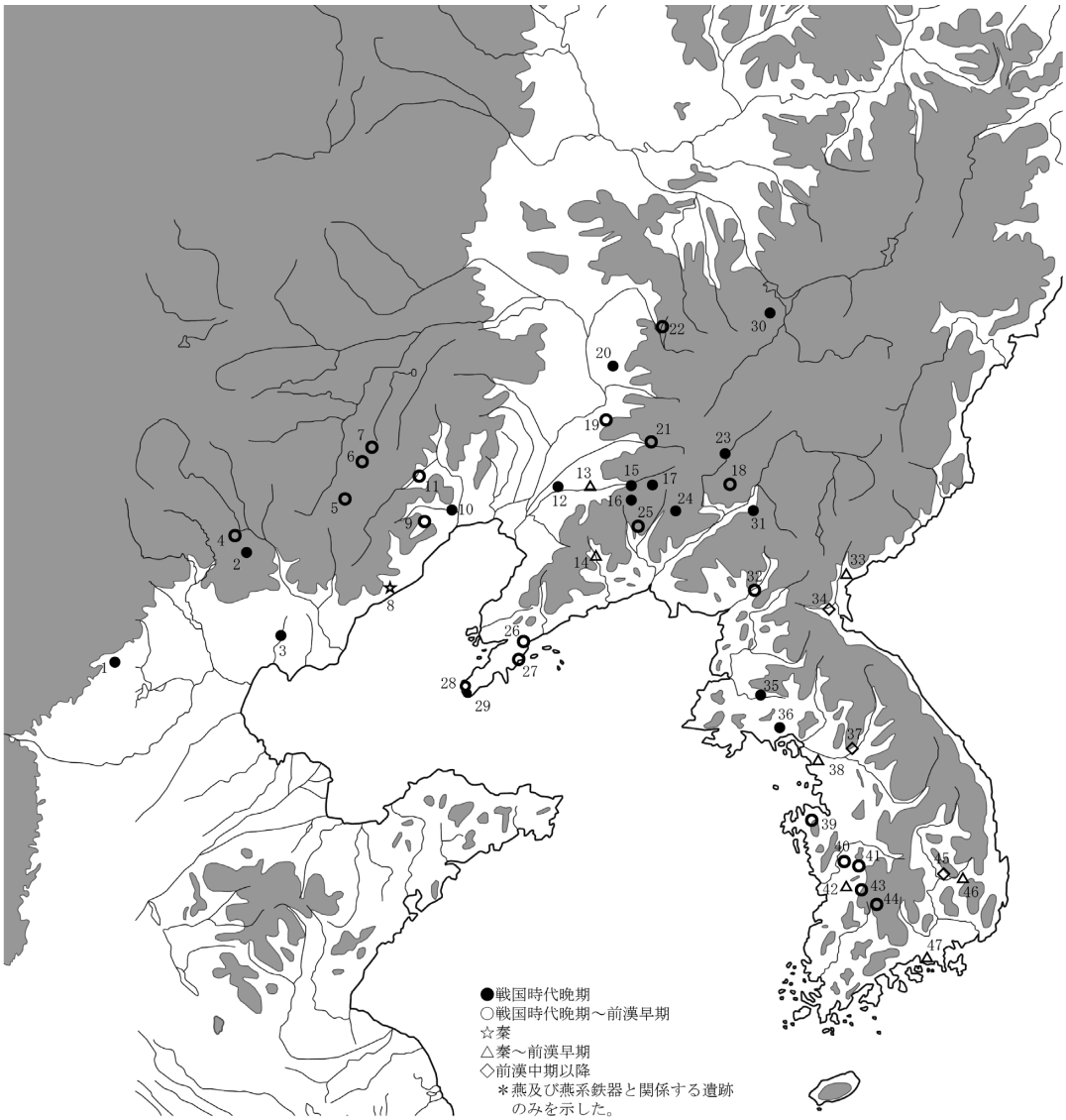
朝鮮半島の粘土帯土器文化期の後半期、それに併行する日本列島の弥生時代前期末から中期前半に現れる鉄器は、燕或いはその系統を引くものである（潮見1982）。そして、燕鉄器の拡散範囲と年代については、朝鮮半島北部の清川江流域までは戦国晩期に普及することが共通認識となっている（鄭白雲1960、王1997、李南珪2002、白2005、他）。しかし、朝鮮半島南部へは衛氏朝鮮成立後である紀元前2世紀にまで下るという見解（李南珪2002、孫明助2007、金一圭2007）と、遼東地域と同様の戦国晩期に舶載されるという見解（中村2008、金想民2009、李昌熙2011）に分かれる。さらに近年の研究では、朝鮮半島南部においては燕や漢では確認できない型式の鉄器があるという言及がなされるようになり（村上2008、金想民2012）、より複雑な鉄器伝播の状況が明らかになってきた。

一方、燕は戦国時代中期末ごろから、中国東北地方（遼西地域及び遼東地域）に郡を置き、長城や土城を建設する。さらに、そうした施設は秦や漢によって継続的に利用される。そのため、燕から漢にかけて、この地域には多くの鉄器が出土するようになる。しかし、燕の鉄器から漢の鉄器へ移り変わる様相自体は、正確には把握されておらず、かつて村上恭通（1998）が提示した、前漢の時期に中原系の凹口鍤などが加わるという見解がみられるに過ぎない。

同様に、中国東北地方において戦国晩期の段階で鉄器製作が定着したかどうかも明確にはなっていない。李スンジンら（1973）は遼東地域と朝鮮半島北部の清川江流域の鉄器が同一様式であるとし、燕周辺民族の鉄器化段階として、細竹里・蓮花堡類型という概念を提示した。この概念は同一文化の広がりを重要視するため、燕国鉄器との差異についてそれほど意識していないが、その中の寧辺細竹里には燕にない鉄戈が存在することが指摘されており（潮見1982、李南珪2002）、この類型内での鉄器製作の定着が示唆されている。これに対し、村上恭通（2011a）は、燕の領域内の鉄器は、官営の製作拠点から配布され、在地化しないという見解を提示している。その場合、細竹里・蓮花堡類型に属する地域は遼東郡管轄内の鉄器の提供を受けたと推定されるが、前述した鉄戈のように、燕山南部の燕鉄器とは異なるものがあるため、遼東地域で在地製作されていたか、燕が滅亡後に製作されたかということになり、前者であるならば、村上恭通の想定に矛盾が生じる。加えて後者の秦・前漢にかけての中国東北地方の鉄器製作についても詳細な研究が進んでいない状況である。

そこで、本稿では広域に分布する鉄斧・鋤先、および後の時代に漢とは異なる型式を示す鉄製武器の検討を通じ、燕の鉄器がどのように東方

* なかむら・だいすけ
埼玉大学教養学部准教授，考古学



1. 易県燕下都　2. 興隆副将溝　3. 唐山東歓坨　4. 灤平県東営子　5. 凌源安杖子　6. 建平喀喇沁河東　7. 敖漢旗老虎山　8. 綏中大金郷屯
9. 錦州小荒地　10. 錦州大泥窪　11. 朝陽袁台子　12. 台安白城子　13. 遼陽三道壕　14. 岫岩城南　15. 本溪怪石洞　16. 本溪火車站
17. 本溪上堡　18. 桓仁抽水洞　19. 鉄嶺邱台 20. 昌図翟家村　21. 撫順蓮花堡　22. 梨樹二龍湖古城　23. 新賓龍頭山　24. 寛甸双山子
25. 鳳城劉家堡子　26. 普蘭店高麗寨　27. 金州大嶺屯　28. 旅順牧羊城　29. 旅順南山裡　30. 樺甸西荒山屯　31. 渭原龍淵洞　32. 寧辺細竹里
33. 咸興梨花洞　34. 金野所羅里　35. 鳳山松山里　36. 白川石山里　37. 加平大成里　38. 仁川黔岩洞　39. 唐津素素里　40. 扶餘合松里
41. 論山院北里　42. 益山信洞里　43. 完州葛洞　44. 長水南陽里　45. 大邱八達洞　46. 慶山林堂　47. 泗川勒島

図1　燕及び燕系鉄器出土主要遺跡

表1　編年と併行関係

中国	朝鮮半島	日本列島	備考
戦国時代晩期 秦 前漢早期	粘土帯土器文化Ⅲ期 前半		
	粘土帯土器文化Ⅲ期 後半	弥生時代前期末～中期初頭	朝鮮半島・日本列島で鉄器出現
	粘土帯土器文化Ⅳ期	弥生時代中期前半（須玖Ⅰ式古段階）	三角形粘土帯土器出現
前漢中期	原三国時代早期	（須玖Ⅰ式新段階）	

展開したかを明らかにし、上述の問題に対する基礎研究としたい。なお、本稿で扱う時代と併行関係については表1に示し、主要な遺跡は図1に示しておく。

1. 燕鉄器の概要

(1)燕山南部地域と中国東北地方の鉄器

易県燕下都の報告によると、戦国早期にはすでに鋳造鉄器が製作され（河北省文物研究所1996、石川2012）、戦国晩期になると生産量、種類ともに増大する。燕では鋤、鎌、钁、斧、錘、鑿、刀子、鉄剣、鉄矛、甲冑、車馬具、刑具など多種類の鉄器が製作されているが（図2）、前述したように中原地域で生産されていた直口鍤や凹口鍤（鋤先）が含まれていない[1)]（村上1998 ）。この点で、燕国鉄器に様式的まとまりを認めることができる。

型式的には、燕の鉄器は中原諸国の鉄器との区別が困難な資料が多い。しかし、摘鎌（石包丁形鉄器）については、他地域と若干の差異がある。燕より南方の中山国灵寿城では摘鎌の鋳型が出土しており、そこに彫り込まれた形態をみると、背に隆帯がない。これに対し、易県燕下採集資料をはじめ、唐山東歓坨（図3）などの燕山南部地域東部から渭川龍淵洞のある朝鮮半島北部では、背に隆帯のある摘鎌が多く確認される。中原地域でもこうした型式の摘鎌はないので、隆帯が付加された摘鎌は燕で創作された型式といえる。同様に、長方形の竪鍬（図3-2）も燕で多く確認される型式である。武器については、鉄剣が易県燕下都（図2-17）、灤平東営子でみられるが、基本的に中原地域などの資料と大差ない形態である。これに対し、鉄矛は、刃部最大幅が下方にあることが特徴であり、現時点ではこの形態は燕に集中している。易県燕下都44号墓で大量に副葬されているほか、唐山東観坨でも2点確認されている（図2・3）。

一方、中国東北地方では、摘鎌をはじめ、鍬、钁・斧、鑿などの農工具が出土資料の大部分を占め、前述した燕独自の型式の鉄器が含まれる。戦国時代中期末から晩期に、遼西地域及び遼東地域では、前述したように燕の領域拡大に伴って、土城や長城が出現する。上記の鉄器も土城などの築造や周辺の開墾に使用されたのだろう。さらに、燕は戦国晩期には遼東半島から朝鮮半島の清川江流域までその版図を広げることが指摘されている（石川・小林2012）。燕の領域が面的なものであったかは議論する必要があるが、細竹里・蓮花堡類型とされる異民族の領域においても、農工具だけでなく、燕に関係する鉄製武器が出土することから、清川江流域までの首長層は、単なる交易相手ではなく、少なくとも燕に服属する立場であったことが推定されよう。その中でも本渓怪石洞の鉄戈は、燕の銅戈を手本として製作されたものであり、遼西地域以西にはないことから、遼東地域での鉄器製作が推定しうる資料である。また、中国東北地方で最も多い鉄製農工具についても、前漢早期の岫岩城南（鞍山市岫岩満族博物館2009）のように、燕の系譜を引きつつも型式的には異なる資料が確認され始めた。つまり、前漢の初期には遼東地域において鉄器が在地製作されていたといえ、本渓怪石洞の鉄戈を考慮すると、それが戦国晩期までさかのぼる可能性が出てきたのである。

ところで、近年では、鉄斧の資料観察から、燕本国の鉄器と朝鮮半島の鉄器とでは、合笵方法が異なることが指摘されている（村上2008、李昌熙2011）。燕山南部以外の地域における在地製作の有無を考える上で、鋳型及びその合わせ方が重要であることがわかってきた。

(2)鋳型と在地製作

鉄器の鋳型が出土した遺跡は燕の領域内では

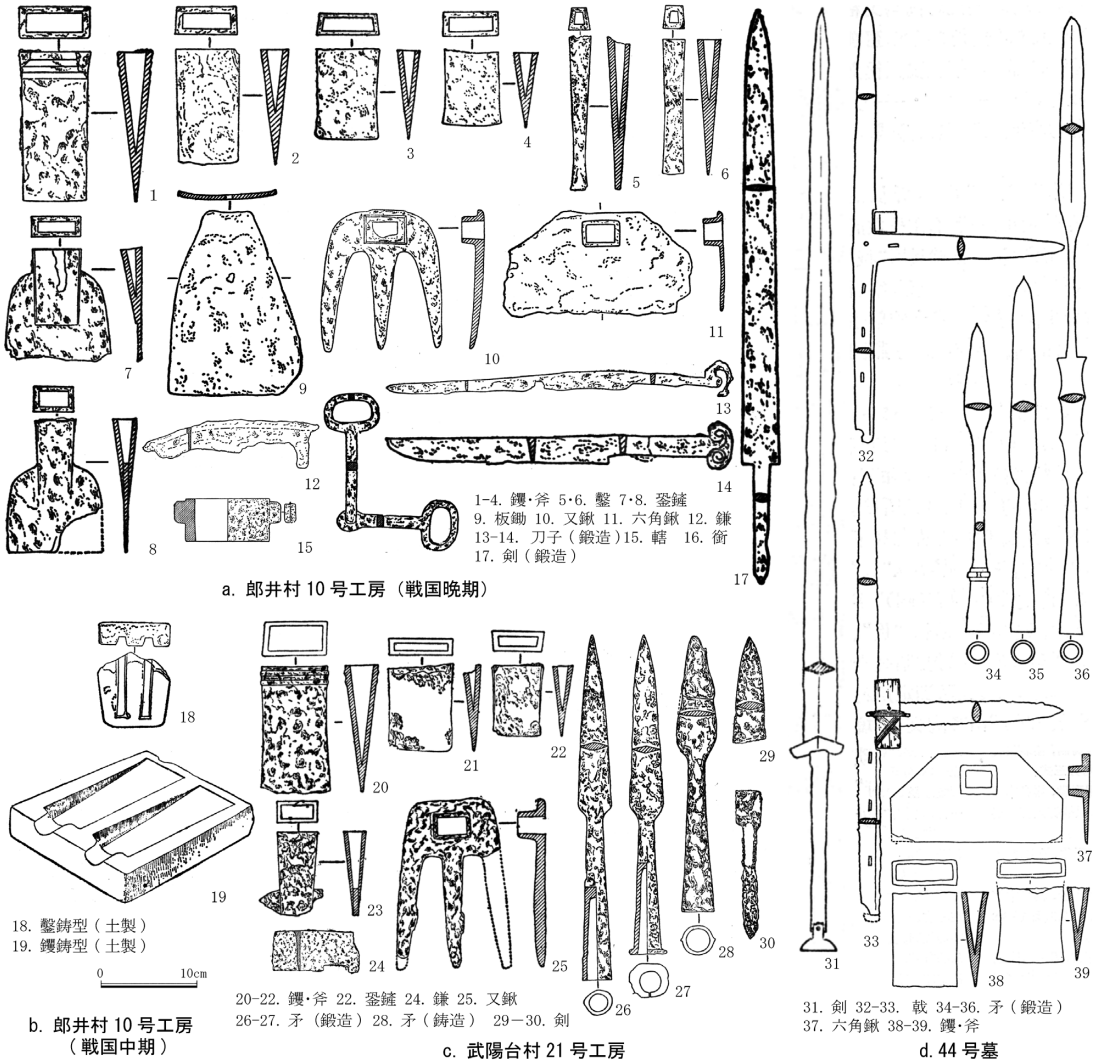


図２　燕下都の鉄器と鋳型

決して多くなく、易県燕下都のいくつかの工房、興隆副将溝[2)]で確認されている程度である。燕下都郎井村10号工房からは陽笵のみに彫り込みをする単合笵で製作された钁と鑿の陶笵などが出土しており、陶笵が主体である。鉄笵は中子しか確認されていない。鉄製の外笵は、燕下都より北方に位置する興隆副将溝で多く出土している（図4）。鉄斧の鋳型についてみてみると、報告では钁（図4-4）と二条突帯をもつ斧（図4-5）の両方が、陰陽笵に彫り込みをもつ双合笵で鋳造されていたような復元であるが、彫り込み面の深さをみると、钁は単合笵であったようである。燕の钁は基本的に単合笵で製作されるという指摘もある（村上2011a）。こうした技術の広がりと、双合笵で製作されたものが混じる朝鮮半島（村上2008）の钁がどのような経緯で出現したかを理解することが、燕国鉄器が変容した燕系鉄器の出現を理解する上で重要であるといえよう。

一方、興隆副将溝の鋳型には右廩という銘文があることから、ここは当時の燕の官営工房であったようである（鄭1956）。近年、村上恭通

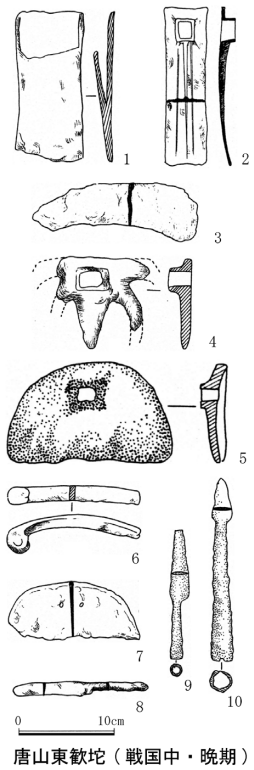


図３　燕南南部地域の鉄器

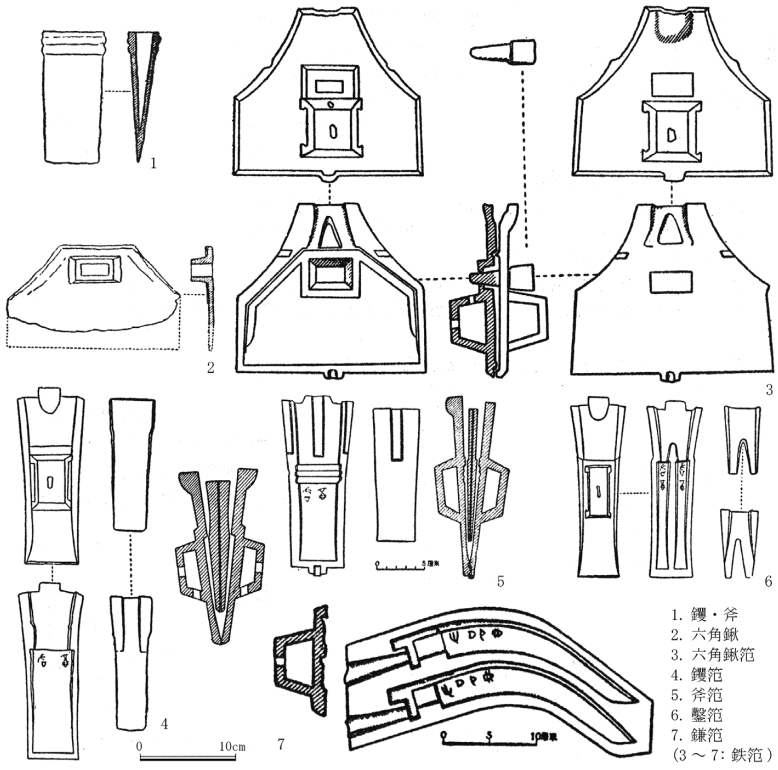


図４　興隆副将溝出土鉄器及び鉄製鋳型（戦国晩期）

（2011a・b）は、副将溝で製作された銘文のある鉄器が梨樹二龍湖古城まで流通していたことを指摘し、中国東北地方では鉄器の在地生産は行われず、燕の生産拠点を中心とした流通であったと推定した。加えて、村上恭通は遼東地域までの燕の鉄器は管理された生産拠点からもたらされたものとし、前述した単合笵と双合笵の差異から、朝鮮半島の西北部において鉄器製作の在地化が行われた可能性にも言及している。

鉄器製作の在地化の最も確かな証拠は、鋳造に使用した鋳型や各種の炉が出土することである。しかし、こうした資料は少なく、二次的な方法として製品の特長から判断する場合が多い。日本列島においても古くから弥生時代に出土する有樋鉄戈が、国産であるかどうかという議論がある（藤田1974、潮見1982）。型式的に日本列島にしか存在しないが、鉄器製作技術が当時にないというジレンマがあり（村上1998、笹田2012）、解決が難しい。朝鮮半島の事例も同様であり、朝鮮半島南部では、須玖Ⅰ式に併行する原三国早期に釜山東莱で鍛冶炉が、紀元後2世紀頃に大邱隍城洞で溶解炉が発見されているが（孫2012）、それ以前には、こうした炉が発見されていない。そのため、粘土帯土器文化期の後半期（Ⅲ期後半・Ⅳ期）に湖西・湖南地方で出土する燕とは異なるとされる銎端部に隆帯をもつ鉄斧（村上2008、李昌熙2011、金想民2012）が近年、注目されているが、単純にこの地域で在地生産されたと判断することができない状況にある。従って、時期が下って朝鮮半島北部にいた準王が南部に移住したことが鉄器流入の契機であると示唆する論考（李南珪2002）を除いては、朝鮮半島北部のどこかで生産されたものが交易でもたらされたと推定する論考が主流となっている（村上2008、石川・小林2012）。その場合、鉄器の型式変化がどこで起こったの

かが重要であるが、遼東地域の鉄器に対する検討も少なく、朝鮮半島北部の資料を実見できない状況も加わり、整理が進んでいない。

朝鮮半島の鉄器は多くの研究者が指摘しているように、遼東地域の鉄器との共通性が高い(李南珪2002、李昌熙2011)。従って、朝鮮半島の鉄器化を考える上では、前述した鉄器自体の型式差や合笵方法も含め、遼東地域の鉄器の様相を把握する必要がある。そこで、次章以降、中国東北地方に広く普及する钁や斧、鎌などの農工具、鉄剣と鉄矛などの武器の検討を中心に、燕国及び燕系鉄器の展開を考えてみたい。

2. 農工具と武器の分類

(1)農工具

钁・斧　銎部をもつ細長方形の鉄器は、日本考古学では鉄斧、韓国考古学では鋤先と理解されている。中国考古学では、農具と推定されるものを「钁、鐝」とよび、伐採具と推定されるものを「斧」、やや形態的に短く加工に使ったと推定されるものを「錛」とよぶ。しかし、中国考古学でも同一形態のこうした道具に対する呼称は一定しておらず、研究者ごとに認定の基準が異なっている。石川岳彦もこの問題について注意を促しており、「斧(钁)」という用語を使用している（石川・小林2012)。農具か工具かという点は非常に大きな問題であるが、実際にどちらに使用されたかは判断できない場合が多いため、本稿でも「钁・斧」と表現することとする。

钁・斧は戦国時代晩期に併行する段階には中国大陸から朝鮮半島まで広くみられるものであるため、これらを統一的に区分できる分類を行う必要がある。村上恭通(1998)、金相民(2012)、李昌熙(2011)らによって提示された視点を参考に、断面形態と銎端部形態を主たる基準として分類を行う（図5)。また、あわせて鎌、鉄剣及び鉄矛の分類を提示する（図6・7)。

A型　：長さ15cm程度で、長さと幅の比が2：1程度の形態である。二条の突帯をもつ。

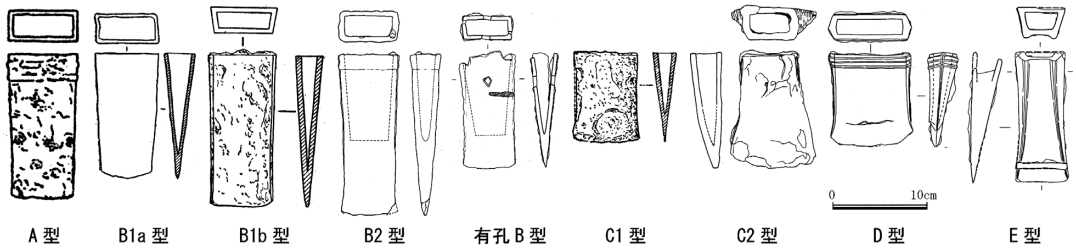
B1型：長さ15cm程度で、長さと幅の比が2：1程度の形態である。断面が長方形のB1a型と、梯子形のB1b型がある。型もたせとの痕跡とみられる孔をもつものは、有孔B1型とする。

B2型：B1型に類するが、断面が長方形で銎端部に段がある。型もたせとの痕跡とみられる孔をもつものは、有孔B2型とする。

C1型：長さが10cm程度で、長さと幅の比が1.5：1程度の形態である。銎部幅よりも刃部幅が広いものも含まれるが、著しい幅の長短差はない。型もたせの痕跡とみられる孔をもつものは、有孔C1型とする。

C2型：銎部幅よりも刃部幅が広い。銎部は直線的であるが、銎部と刃部の境から先端に向けて広がる。

D型　：刃部が扇形に開く型式で、多くが二条突



A 型：易県燕下都武陽台 22 号工房　B1a 型：敖漢旗老虎山　B1b 型：易県燕下都解村東北 3 号墓　B2 型：扶餘合松里
有孔 B 型：長水南陽里 1 号墓　C1 型：易県燕下都辛庄頭 30 号墓　C2: 大同中里　D 型：福岡御床松原　E 型：永川龍田里

図 5　钁・斧の分類

帯をもつ。

E型　：断面が明確に梯子型（台形）で、上面が短く、下面が長い。

これらの钁・斧のうち、A型とB型は戦国時代から前漢までみられる型式であり、前漢以降減少するとされる（村上1998）。B1型は基本的に钁として報告されるが、B1a型は包山楚墓M2の柄のある事例（白2005）のように斧として使用される場合もある。A 型も斧として報告されることが多い。C1型は燕下都でも戦国晩期半ば以降に出現する型式であるが、サイズ以外はB1型との形態差は小さい。おそらくは報告にあるように錛として利用されたものだろう。C2型は漢代に多い形態であり、楽浪郡や朝鮮半島南部でもみられる。

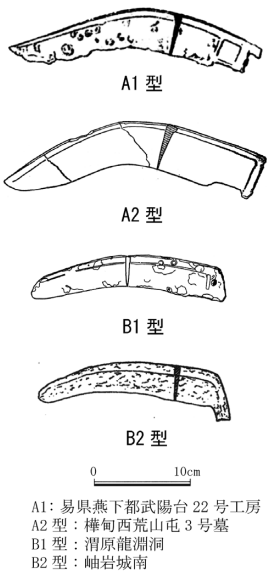


図 6　鎌の分類

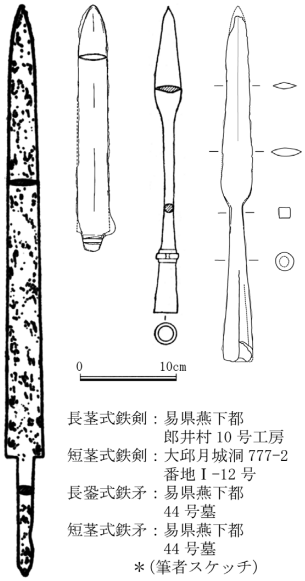


図 7 鉄剣及び鉄矛の分類

鍛造、鋳造に関わらず、この型式が増加するため、少なくともA型と交代していったと考えられる。D型はC1型から派生した可能性もあるが、銅斧から転換したという指摘もあり、長城地帯に多く、王莽期以降に変化が進んだとされる（村上1988）。ただし、莱蕪亓省庄では三条突帯のD型に類した鉄笵が出土しているので、山東省では漢の初期から形態的にはこの種の鉄器が製作されていたことがわかる（図8-12）。E型は朝鮮半島南部の独自型式として古くから知られているものである。原三国時代前期には現れており、渭川龍淵洞の資料（B1b型）から型式変化したとされている（村上1998・2011）。

近年の研究で言及されることの多い鋳型の合わせ方については、A型は興隆副将溝の報告において双合笵で製作されたとされ（鄭紹宗1956）、これを用いて鋳造した資料も側面中央に合せ目が明確に確認される[3)]。これに対し、前述したように興隆副将溝のB1型は単合笵で製作された推定されるので、A型とは製作方法が明確に区別されていたことになる（華覚明1999、李昌熙2011）。陶笵については、すでにふれたように、参考になる資料が燕以外でも確認されているので、ここでそれらの資料を確認してみよう。

まず、燕の南にある中山国霊寿城では単合笵でB1型钁・斧を鋳造した方法を示す資料が出土しており（図8-1・4）、陰笵は平板状のものでよいことがわかる。また、鶴壁鹿楼冶鉄遺跡では、钁・斧の被熱痕跡が残る平らな陰笵が出土している（図8-9・10）。ただし、钁の鋳造は単一の方法でなされるわけではない。霊寿城には中子固定する部分がない資料があり、双钁・斧笵、単钁・斧笵の中には、刃部先端に向かって狭くなる空間に中子を落とし込むだけの鋳型も存在したことがわかる（図8-2・3）。この種の陶笵は登封陽城鋳鉄遺跡（図8-14）、鶴壁鹿楼冶鉄遺跡（図8-11）、燕下都郎井村10号工房（図2-19）など、戦国時代中・晩期の諸国でみられる。なお、組み合わされる中子については、片側だけに一段高くなった平坦部のある鉄製中子がいくつかの遺跡で出土していることから（図8-6）、これが使用されたと推定され、図8-16（李京華・陳長

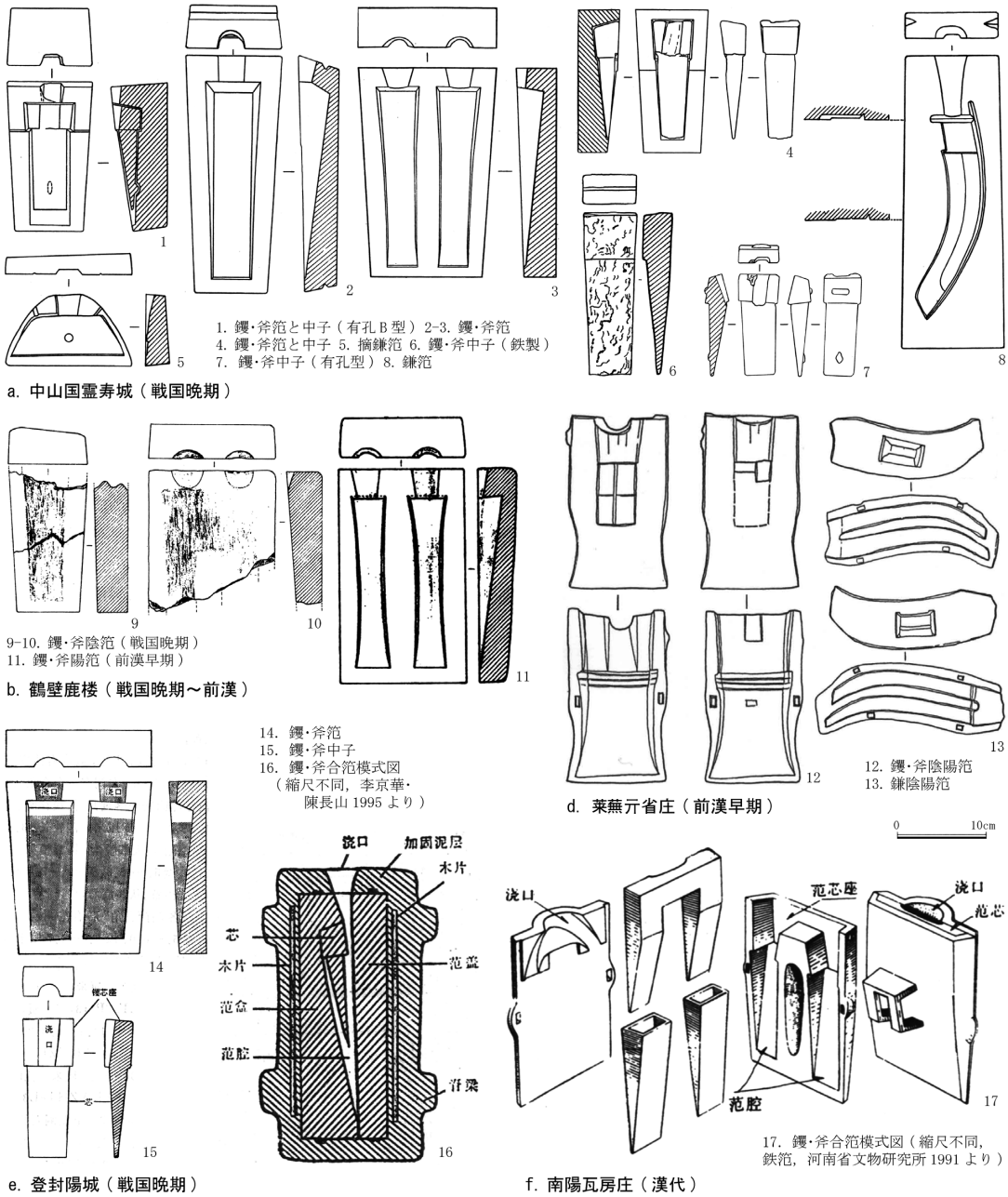


図８　戦国時代から漢代の鋳型及び鋳造模式図

山1995）のような合わせ方が復元される。

鑊は戦国晩期には双合笵と単合笵の二種が併存し、漢代になると地方を除いて双合笵が主流になるという見解があるが（李京華2007 pp.43-44）、南陽瓦房荘では漢代の鑊（B1a型）の模などが出土しており、ここから笵をおこすと単合笵になり（図8-17）、双合笵ではない。また、珍しい事例であるが、前漢代の韓城芝川鎮冶鉄遺跡では、双鑊・斧笵の背面が陰笵として利用できる両面利用可能な笵が出土している（陝西省考古研究所華倉考古隊1983、p28）。この背面は陰笵として使用されており、これをみ

ると、湯口と钁・斧の形僅かな凸面が作られている。陽笵は深く彫りこまれているので、やはり、陽笵で钁・斧の形態を決定する単合笵であったことがわかる。これらの事例をみると、B1型は時代が下っても基本的には単合笵で製作されたことが理解できよう[4)]。また、前漢早期の莱蕪亓省庄から出土したD型に類した三条突帯の鉄笵が複合笵であることを考慮すると（図8-12）、同じく突帯をもつA型钁・斧は戦国時代から継続して複合笵で製作され、B1型とは区別されてきたことがわかる。従って、基本的に戦国時代の諸国では、B1型钁・斧は単合笵による鋳造であり、広い地域で共有された技術と理解される。春秋中期頃の晋の侯馬鋳銅遺跡では青銅製の钁を鋳造する単合笵が存在することから、中原地域において、ある時点で青銅製のB1型钁・斧の鋳造方法が双合笵から単合笵に変化し、それが鉄製の钁・斧にも継承されたようである。

また、必ずしも形態と用途が一致するとはいいきれないが、断面梯子形で上面と下面の長さが違うE型や、そうした資料も含むB1b型は、少なくとも縦斧としては使用できないので、多くが钁であったと推定される。これに対し、A型、D型はわざわざ双合笵で上面と下面の長さがずれないように製作されていることから、斧や工具としての利用が多かったと推定されよう。単合笵か双合笵かを区別する際には、断面形態が有効であるという指摘もある（李昌熙2011）。

鎌　鎌は背に隆帯をもつ型式が多く、中原地域だけでなく、燕山南部、東北地方など広い地域で確認されている。ここではやや相対的な指標であるが、身部の屈曲の強さ、身部と基部の境界に縦方向の隆帯があるかで分類する（図6）。

A1型：身部が強く屈曲する形態で、背から基部にかけて隆帯がめぐり、境界部にも隆帯がある。

A2型：身部が強く屈曲する形態で、背から基部にかけて隆帯がめぐるが、境界部に隆帯がない。

B1型：身部が緩やかに湾曲する形態で、背から基部にかけて隆帯がめぐり、境界部にも隆帯がある。A1型の再加工品の可能性もある。

B2型：身部が緩やかに湾曲する形態で、背から基部にかけて隆帯がめぐるが、境界部に隆帯がない。

単純な形態であるため、基本的に単合笵で製作される。漢代になると鍛造の鎌が増加するが、早期には鋳造鎌も残存している。莱蕪亓省庄の鉄笵は双合笵であり、戦国時代の鋳造鎌と異なる（図8-13）。漢代の資料は鋳造品でも鍛造品でも、形態的にはB型鎌に近い点には注意しておきたい。

(2)武器

剣　鉄剣は戦国時代の諸国で確認されるが、同時期の朝鮮半島、日本列島では出土しない。漢代になると、朝鮮半島まで広く普及するが、茎部の長さにより、漢系と非漢系に区別される（高久1992）。鉄剣には長さによる区分があるが、本論には関係しないため、旧稿（中村2012）で使用した茎部の形態区分による分類のみにとどめる（図7）。

長茎式：剣身幅と茎部長の割合が1:2 以上。

単茎式：剣身幅と茎部長の割合が1:1 程度。

燕で製作された剣は全て長茎式であり、漢でもこの種の鉄剣が製作される。燕下都では1点鋳造品がある（石川2012）。遼東地域の在地勢力も保有するが、剣身を銅剣から鉄剣に変えるのは漢代に入ってからである。単茎式は漢代に入って朝鮮半島で盛行する。この単茎式は弥生時代中期後半頃から日本列島に出現するが、朝鮮半島以外では製作されていない。日本列島の八尾市大竹西遺跡では鋳造の単茎式鉄剣がみら

れるため、燕の鉄剣と同様に、朝鮮半島の資料にも鋳造品が混じっていた可能性がある。

矛　鉄矛は前述したように燕独自の形態がある。銎部と刃部の間の連結部の長さによって二種に分類される（図7）。

長銎式：断面正方形の連結部が銎部と同程度以上の長さをもつ。

単銎式：断面正方形もしくは長方形の連結部が銎部の半分程の長さをもつ。

燕では両型式が製作されている。製作技法についても、扇形に開いた銎部を丸めて閉じるのみであり（川越1993）、差異はない。しかし、燕では鍛造鉄矛のみならず、鋳造の単銎式鉄矛（図2-28）がある。朝鮮半島の原三国時代においても長銎、短銎式の二種が併存する。

次章では以上の型式分類をもとに、各地の資料を検討する。今回分類していない鉄器については、必要な場合にのみふれることとする。

3. 燕国及び燕系鉄器の展開

(1)遼西地域

敖漢旗老虎山、凌源安杖子、朝陽袁台子、錦州小荒地などでA型、B1a型、B1b型、C1型钁・斧が確認されている（図9）。ただし、多くの遺跡が秦、漢まで継続して利用されており、敖漢旗老虎山などでは秦の鉄権（図9-19）も出土しているため、基本的に燕の鉄器と推定されるが、新しい時期の鉄器が混じっている可能性も否めない。建平喀左喇沁河東ではB1a型钁・斧の他に、この地域では珍しいB2型钁・斧が確認されている(図9-20)。土器の共伴関係が明確ではないが、石川岳彦（2007）の論考を参考にすると、出土した土器のなかには、戦国時代晩期の土器以外にも、秦～前漢早期の釜が含まれるため、ここもやや新しい時期の資料を含む可能性がある。敖漢旗老虎山でも銎端部が厚くなった钁・斧がみられるが、この資料については鋳バリの残存のようである。朝鮮半島に多いB2型钁・斧とは

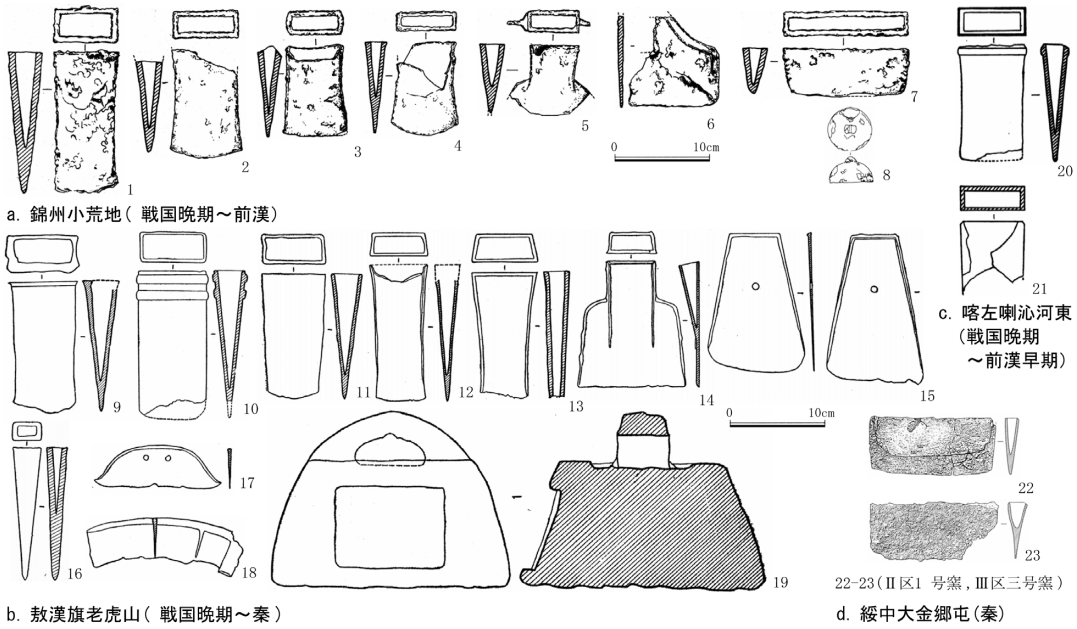


図９　遼西地域の農工具及び鉄権

平面形に差異があるが、この種の钁・斧が遼西地域にもあることには注意しておきたい。

また、綏中姜女石秦行宮遺跡に瓦を供給していた綏中大金郷屯でも鉄器が確認されており、そこでは凹形鍤（鋤先）が出土している（図9-d）。凹型鍤は燕の鉄製農工具にはない器種であり、漢から普及すると考えられてきた（村上1998）。しかし、綏中大金郷屯の事例は、それが秦によって導入されたことを示している。鉄権の普及なども含め、中国東北地方においては、鉄器についても秦による画期を意識する必要があるだろう。今後の重要な課題である。

鉄製武器については、この地域においては戦国時代の資料自体が少なく判然としない。燕山南部にないB2型钁・斧もやや新しい時期に属する可能性も考慮すると、基本的に戦国時代には、燕国鉄器から乖離しない鉄器のみ分布するようである。鉄製武器が副葬されるようなことがないのも、古い段階から、燕の支配領域に入っていたと同時に、それを与える必要のある異民族がいなかったからだろうか。

(2)遼東地域

まとまった鉄器資料は撫順蓮花堡で出土しており、A型、B1b型、有孔B1b型、C1型钁・斧、A1型鎌以外にも、竪鍬、摘鎌などが確認されている（図10-a）。有孔B1b型钁・斧は長幅比がC1型に近いが、断面が梯子形である点でB1 型に含めておく。ここでも遼西地域の事例と同様に、半両銭などの新しい時代の遺物も含まれるため、時期が下る資料が含まれている可能性がある。また、燕の遼東郡に属したであろう梨樹二龍湖古城では土城内外でA型、B1a型、有孔B1b型钁・斧、A1型鎌、竪鍬、刀子が出土している（図10-b）。出土した農工具には前述したように銘文が鋳出された資料が含まれるため（村上2011a・b）、形態的特徴と合わせて戦国晩期の資料といえる。しかし、1号灰坑から出土した有孔B1b型鉄斧は、秦・漢代まで下りうる釜が伴出しているため、時期が下る。全体として、戦国晩期～前漢早期の時間幅があったとみられる。

同様に、遼東郡に服属していたと推定される異民族の地域である樺甸西荒山屯では、C1型钁・斧が6号墓に、A2型鎌が3号墓に副葬されていた（図6）。A2型鎌は燕下都にはあるが、興隆副将溝で製作された型式ではなく、撫順蓮花堡の鎌とも異なっている。鉄器製作工房が複数あったことを示唆する資料といえよう。近隣の遺跡で戦国晩期におさまる例としては、本溪火車站があり、A型とC1 型钁・斧が副葬されていた（図10-c）。また、伴出した明刀銭の年代から戦国晩期でも早い段階と考えられる寛甸双山子（図10-e）ではA型、有孔C1型钁・斧が出土しており、鎌を再加工した摘鎌（図10-31）も出土している。この遺跡が位置する場所は遼東地域でも東端に近いため、鉄器の入手頻度が異なっていたのだろう。同時に、再加工鉄器の存在は、再加工する技術程度は、戦国晩期の早い段階から遼東地域にあったことを示唆する。

岫岩城南では炉址の北側に集中して鉄器が置かれており、時期的な一括性が高い資料が出土している（図10-h）。その中には二種類の凹口鍤が含まれる（図10-49・50）。钁・斧はB1a型、B2型、C1型があり、中国東北地方では新しい型式であるC2型もみられる。A型は三条突帯であり、通常のものとは異なる。鎌はB2型である。鎌の全体的な形状は莱蕪亓省庄の鋳型に彫られた鎌に近いが、背に隆帯が残存している点で、それまでの燕の鉄鎌から変化したものとわかる。こうした新しい型式と、凹口鍤を含む鉄器組成から判断すると、岫岩城南は明確に前漢早期に属する。竪鍬やB1a型は燕国鉄器を継承しているものの、三条突帯のA型钁・斧は燕国鉄器の規範から外れていることから、遼東地域のどこか

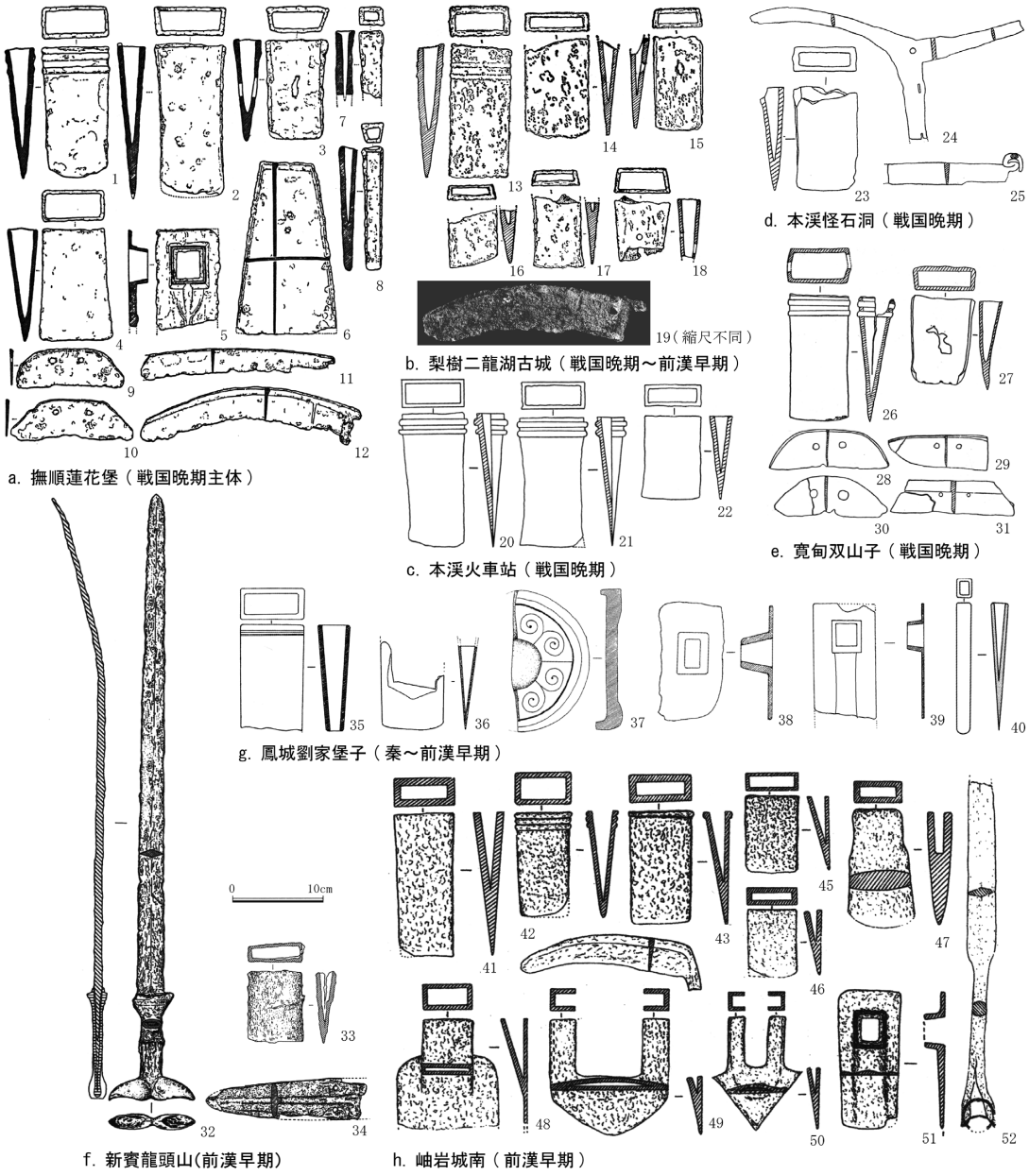


図 10　遼東地域の鉄器と関連遺物

で燕滅亡後に「燕系鉄器」といえる鉄器の製作を行っていた工房があったことが推定される。凹口鍤のような秦・漢の鉄器がそうした工房で製作されたのか、流通によって岫岩城南によって偶発的にそろったのかは定かでないが、これらは同時期の朝鮮半島には広まらない。B2型钁・斧などの朝鮮半島と共通する型式も含まれるが、隆帯が厚く、遼西地域の事例とは近いが、朝鮮半島南部のB2型钁・斧とは異なる。

また、鳳城劉家堡子では前漢早期の瓦や土器に伴って鉄器が出土している（図10-g）。劉家堡子の钁・斧はA型とB1a型、竪鍬は長方形で中央に太い隆帯があるもので、燕の鉄器とまったく変わりがない。これらも、岫岩城南と同様に、

燕系鉄器が漢代に製作されたことを示すものといえよう。さらに、岫岩城南と鳳城劉家堡子は時期も距離も近いが、異なる鉄器型式をもち、前者には燕の鉄器から型式変化したものが含まれていることから、遼東地域では複数の工房がそれぞれ、やや独立したかたちで鉄器製作を行っていたと推定される。

一方、遼東地域では数量は少ないものの、燕或いは燕系といえる武器もみられる。台安白城子では1m以上の長茎鉄剣があり、これは燕下都でも上位層の墓に副葬されるものである。本溪怪石洞では前述したように遼東地域にしか確認されていない型式の鉄戈がある（図10-d）。これは、寧辺細竹里とは異なり、形態的に燕の銅戈から派生したものである。銅戈は銘文から兵制をもうかがえるものであり、上位階層が所持する武器であるため、本溪怪石洞の鉄戈は銅戈に準ずる武器として、異民族の首長に与えられたものと推定されよう。共伴する刀子は易県燕下都で出土する戦国晩期の資料と類似しており、戈の中央部に円孔、その下部に長方形孔が並ぶ点も易県燕下都44号墓で出土した戟と共通しているため、戦国晩期に属するとみてよいだろう。漢代に入る時期にも岫岩城南で燕系の钁・斧などとともに長銎式鉄矛が出土している（図10-52）。また、新賓龍頭山石蓋墓からは触覚式鉄剣と鉄戈の切先が出土しており（図10-f）、後者は寧辺細竹里のものと酷似している（宮里2011）。宮本一夫（2009）の分類を参考に、触覚式銅剣の把頭飾をみると前漢早期の型式に該当する。戦国晩期～秦の頃に属すると考えられる青銅の剣身をもつ本溪朴堡の把頭飾と比較しても、龍頭山の資料が後続することは明らかであり、矛盾しない。龍頭山の触覚式鉄剣の存在は、前漢早期には在地首長層が鉄剣を入手し、独自の武器に加工することができる状況であったことを示すものとして重要である。

以上の様相を整理すると、戦国晩期から、総じて遼東地域では遼西地域以東ではみられない有孔钁・斧が多く、燕本国とは差異が認められる。加えて、前漢代になると、燕国鉄器の系譜は引きつつも、農工具、武器ともにより規範が崩れ、触覚式鉄剣のように異民族の嗜好に即したものが製作されるようになる。こうした様相は、遼東地域における戦国晩期段階での鉄器製作と、その漢代までの継続を示唆しているといえよう。

(3)朝鮮半島北部

鴨緑江流域では渭川龍淵洞、清川江流域では寧辺細竹里で比較的まとまった鉄器が出土している。前者は墳墓であり、長銎式鉄矛2点のほか有孔B1b型、B1b钁・斧、B1型鎌、細長方形の竪鍬などが出土している（図11-a）。明刀銭のみが出土していることから、戦国晩期でも晩期末まで下らないとされる（潮見1982）。寧辺細竹里でも明刀銭が出土し、钁・斧はA型、B1型、B2型がみられる。鎌はB1型かB2型か判別できないが、少なくともB型であり、撫順蓮花堡や渭川龍淵洞に類似した竪鍬もある（図11-b）。そして、細竹里からはこれまで何度がふれた、中央に隆帯があり、双孔をもつ鉄戈も出土している（図11-17）。前述したように近年、新賓龍頭山石蓋墓から触覚式鉄剣、B1a型钁・斧とともに類似した鉄戈が出土している。これらは前漢早期の資料であるため、寧辺細竹里の鉄器も戦国晩期から前漢早期まで幅があることがわかる。

大同江流域に近いところでは鳳山松山里で、臨津江流域に近いところでは白川石山里で、B1a型钁・斧が、在地の粘土帯土器文化の墓に副葬されており、钁・斧の型式も含め、朝鮮半島南部と共通する様相がみられる。日本海側でも咸興梨花洞で紀元前2世紀に下る時期に、やはり在地の首長層の墓に钁・斧が副葬されるが、こちらはB1b型である。

楽浪郡が設置された段階になると、大同江流域ではA型、B1型钁・斧は姿を消し、C2型钁・斧が主流になる。しかし、日本海側では、近い時期の所羅里土城内の墓からB1a型、B1b型钁・斧が出土している（図11-c）。何らかのかたちで燕系の鉄器製作が保持されていたことがわかる。後述するが、この様相は、朝鮮半島南部でも共通しており、楽浪郡成立前後にはなぜか、燕系鉄器が再登場する。

武器については、渭川龍淵洞で長銎式鉄矛が2点出土しており、これらは燕下都44号墓の鉄矛と全く同様の形態をもつ（図11-4・5）。銎部を閉じている部分も、朝鮮半島南部の原三国時代前期に副葬される資料とは異なり、目立たないように丁寧に閉じられている。この点も燕下都44号墓で出土した鉄矛と共通する点であり、龍淵洞の銅矛が燕の産物であることがわかる。

遼東地域の山地部から清川江流域まで、蓮花堡・細竹里類型として括ることができるという見解があるように、寧辺細竹里の鉄戈も含め、朝鮮半島北部は遼東地域と共通する部分が多い。戦国晩期で鉄製武器が出土するのは清川江流域までであり、これより南では漢代になるまで鉄製武器は出土しない点も、ここまでが燕と直接関係した地域であったことを示している。

(4)朝鮮半島南部

湖西地方、湖南地方では大量の青銅器をもつ首長墓が点在し、多鈕細文鏡が盛行する粘土帯土器文化Ⅲ期後半からⅣ期（中村2010）にかけて鉄器が伴出するようになる（図12）。これらは全てB型钁・斧である。この時期の钁・斧には扶餘合松里のように銎部の端が肥厚する型式であるB2型がいくつか含まれる。このB2型鉄斧は村上恭通（2008）や金相民（2012）によって、燕や漢にない型式と想定されている。しかし、先に検討したように、遼西地域、遼東地域に点在しており、燕の钁・斧の型式に全く含まれないということはない。また、朝鮮半島南部のB2型钁・斧の起源として細竹里のB2型钁・斧が注目されているが（石川・小林2012）、朝鮮半島南部のものと比較すると短い。むしろ、遼西地域や遼東地域で確認されるB2型の長さに近い。この長さの差異は、製作地の差異である可能性を示唆するものだろう。

完州葛洞3号墓と9号墓、長水南陽里1号墓、唐津素素里で有孔B型、長水南陽里3号墓と4号墓で有孔B2型が出土しており、有孔の钁・斧が多い（図12）。中山

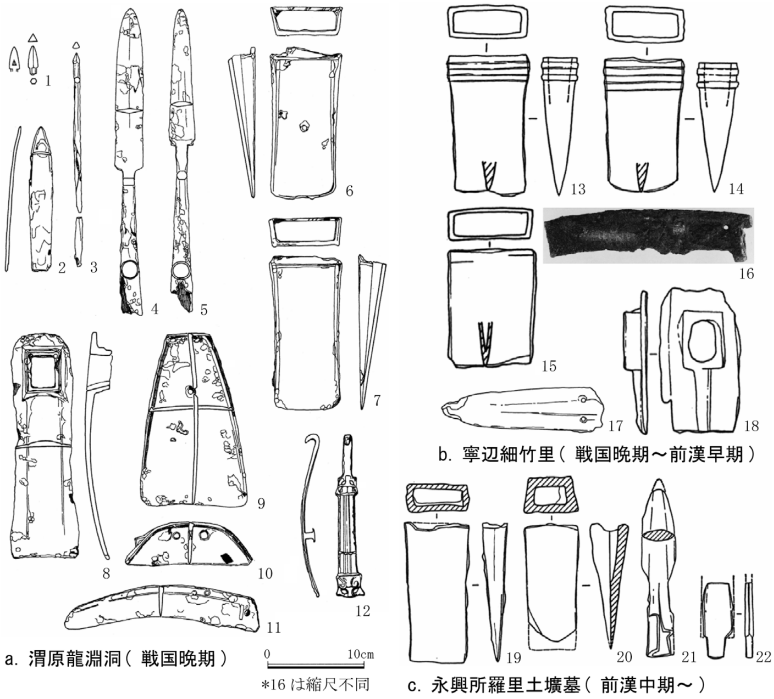


図 11　朝鮮半島北部の鉄器と関連遺物

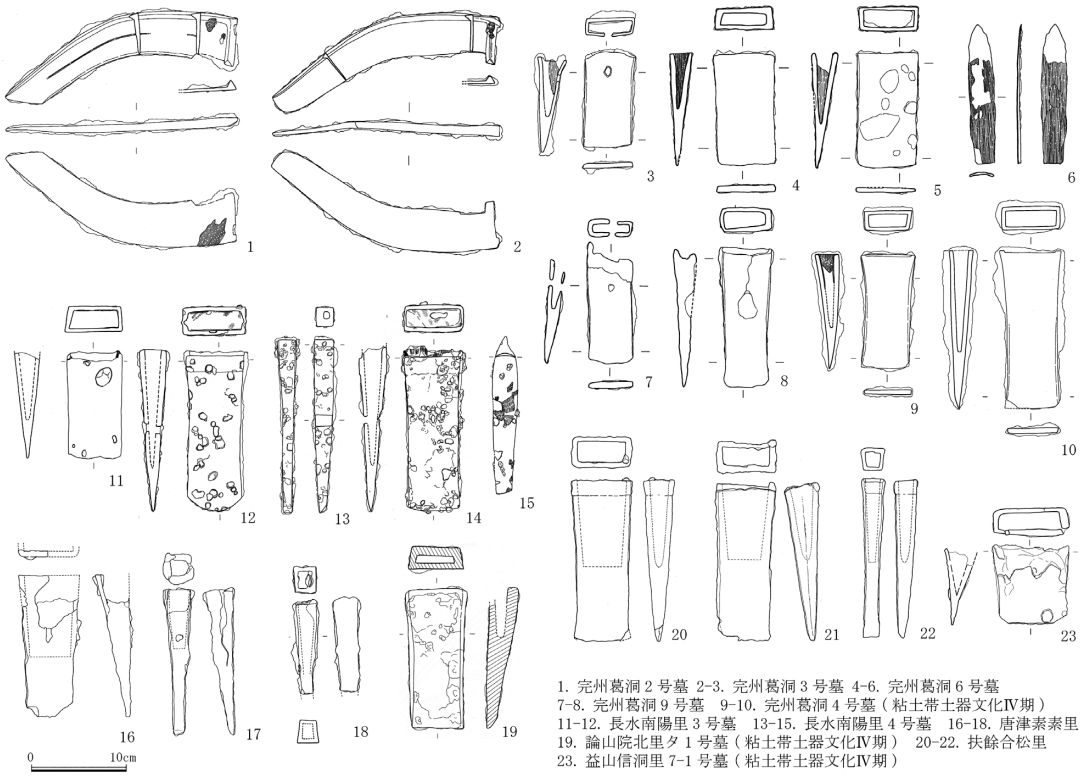


図 12 湖南及び湖西地方の粘土帯土器文化Ⅲ・Ⅳ期の鉄器

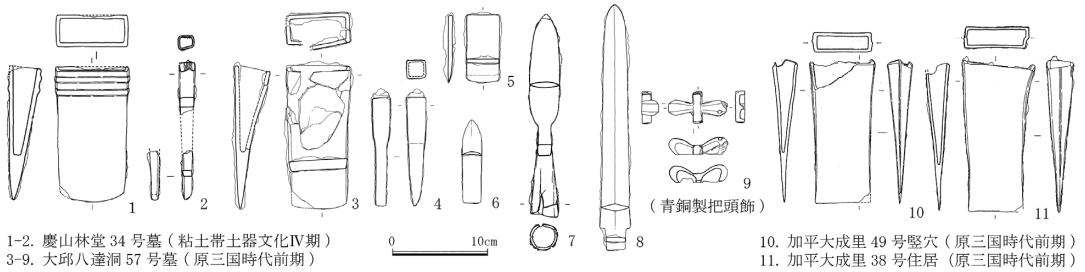


図 13 嶺南地方及び京畿地方の粘土帯土器文化期Ⅳから原三国時代前期の鉄器

国霊寿城（図8-1・7）や鶴壁鹿楼などでは型もたせを持つ中子が確認されており、有孔の钁・斧は、戦国時代には一つの製作方法として存在はしていたが、燕下都を含む燕山南部地域では確認されていない。先に検討したように燕の領域では東端である遼東地域でみられるようになる。燕の東方拡大による他国工人の招来、戦国諸国の滅亡時における燕以外の技術流入といった可能性もあるものの、型もたせで中子を支える方法は、湯口近くに段を設けて中子を吊り下げるよりも簡単であるので、少なくとも遼東地域での工房設置時にその地域における製作の簡略化が起こったと判断される。

また、B型钁・斧のうち、双合笵で製作されたものは、扶餘合松里のB1a型（図12-21）、長水南陽里3号・4号のB2型（図12-12・14）があり、型もたせの孔と同様に、型式を越えて確認される。本来、A 型で使用されるべき鋳造方法が、混同されたという理解（李昌熙2011）が現時点では妥当であろう。

この混同がどこで生じたかが重要であるが、これについては、資料の観察が足りていないので、今後の課題としておきたい。ただ、双合笵で製作されるB1a型钁・斧は、原三国時代前期頃の朝鮮半島の南北で存続している。大邱八達洞のB1a型は李昌熙（2011）が指摘するように全て双合笵であり（図13-3）、加平大成里のものも同様である（図13-10・11）。前述した所羅里（図11-19）も含め、漢の一般的な製作方法とは異なる製作技法が遼東地域から朝鮮半島北部に残存していた可能性が高い。

鋳造の鎌については、完州葛洞2号墓及び3号墓でA2型鎌が副葬されている（図13-1・2）。この資料は先に挙げた遼東内陸部でも異民族の地域にあたる樺甸西荒山屯出土鎌（図6）と極めて類似する。樺甸西荒山屯の触覚式短剣は剣身がまだ青銅製の段階であり、鎌も燕下都の戦国晩期の資料と大差ないことから、戦国晩期に位置づけられる。葛洞3号墓は完州葛洞の中でも最も古い段階に属するので、やはり、戦国晩期から鉄器が流入していたことがわかる。同時に有孔B型钁・斧も戦国晩期には形成されていたこともわかる。

また、葛洞4号墓は粘土帯土器文化Ⅳ期に下る墓であるが、ここからはB1a型、B1b型钁・斧が出土している。前述したように、湖西・湖南地方では一貫してB型钁・斧が流通することがこうした事例から理解される。

一方、粘土帯土器文化Ⅳ期には、嶺南地方でも鉄器がみられるようになる。慶州林堂34号墓では、A型钁・斧が出土している（図13-1）。また、泗川勒島でも粘土帯土器文化Ⅳ期から原三国時代早期にあたる時期のA型钁・斧片が出土している（李昌熙2011）。その後の原三国時代前期からは、楽浪郡の中・下位層と共通する短茎鉄剣や鉄矛が出現するとともに（図13-7・8）、少量みられるB1a型钁・斧（図13-3）を除き、楽浪郡と共通するC2型や、朝鮮半島にしか分布しない断面台形のE型钁・斧が主体になる。鎌も燕のような鍛造品ではなく、鋳造品が使用されるようになり、全体的にそれまでの鉄器とは異なるようになる。こうした状況から、燕が滅亡し、楽浪郡と共通する鉄器が出現する時期の僅かな期間に、限定的に嶺南地方のみA型鉄斧が流入したことが指摘される。

嶺南地方を代表として、朝鮮半島南部では、鉄製武器は楽浪郡成立前後の原三国時代早・前期から出現する。楽浪郡の中・下位階層が所持する短茎式鉄剣のみが普及し、長茎式鉄剣は後漢代の紀元後1世紀後半以降からしか出現しない（中村2012）。矛の出現も原三国時代前期からであり、長銎式と短銎式の二種があることと、製作技法が燕の鉄矛と共通する。しかし、燕の鉄矛製作を継承しつつも、燕の滅亡から100年以上経過して、朝鮮南部に普及することから、燕から直接もたらされたのではない。この間、鉄矛を含めた燕系鉄器の製作技術がどこかで保持されていたと考えらえるが、この時期には遼東地域にも良好な資料は多くない。

なお、近年では粘土帯土器文化期の鉄器加工技術を垣間見せる資料が出土しているので、ここで少しふれておきたい。京畿地域の安城萬井里2-ナ-1号土壙墓では、粘土帯土器文化期Ⅲ期後半頃と考えらえる石鏃、銅鏃、鉄鏃が副葬されていた。素材の差を越えて全て同一形態であるとともに、この形態の鏃は朝鮮半島南部にしかない。鉄鏃は鉄鉇を再加工したものであるので（金一圭2012）、朝鮮半島南部で鉄器自体が製作されたとはいえないが、再加工することは可能であったようである。遼東地域の事例も含め、鉄器が拡散する際には、やはり簡単な再加工の技術から取得されるようである。

4. 結論

(1)燕系鉄器の出現

これまでの検討で、遼西地域では燕山南部地域と、型式的にはほぼ同様の資料があり、秦の拡大によって、新たな中原系の農具が入ることがわかった。建平喀左喇沁河東のB2型钁・斧のような、燕山南部地域で確認されていない型式がいつの段階で成立するのかについては、ほとんどの遺跡で秦・前漢早期の資料が混じるため、この地域だけでは明確にはできないが、他地域でも例外なく新しい時期のものが混じるので、戦国晩期から下る時期に生成された可能性が高い。

これに対し、遼東地域と朝鮮半島北部の清川江流域では、戦国晩期の時点でA型、B1型、B2型などに加え、有孔B型及び有孔C1钁・斧が出土している。钁・斧の型式が最も多様であると同時に、朝鮮半島南部と共通する資料も含んでいる。さらに朝鮮半島に近い地域では再加工品も認められる。また、遼東地域では双合笵で製作された資料が存在する可能性もある[5)]。

遼東地域では、戦国晩期で有孔钁・斧や鉄戈があることから、戦国晩期から少しずつ燕国鉄器の規範からはずれた鉄器が生まれ始め、秦・漢代には新しい鉄器の影響も受けつつ、より燕の規範からはなれた鉄器が製作されたと理解される。前漢早期には、私営鉄器工房を容認した時期があり（東1982、白2005）、それがさらに型式的な変容を招いたのだろう。遼東地域でも辺縁に近い岫岩城南の資料はまさにその産物である。また、前述したように、この時期には近接した遺跡でも型式の異なる鉄器があることから、本来、燕の工房が複数あり、それらの一部が私営化することで、鉄器により多様性が生まれたとみられる。つまり、燕系鉄器は戦国晩期の段階に遼東地域で生まれ、漢代にさらに展開したといえるのである。

一方、遼東地域の中でも遼東半島では、現時点でB1型钁・斧しか確認されておらず、やや特殊な様相を示している。また、牧羊城出土資料は、戦国晩期から漢代までの鉄器を含んでいるが、その資料には双合笵はないという（笹田2007）。一見、遼東半島はB型钁・斧しかない朝鮮半島南部の湖西・湖南地方と類似しているが、朝鮮半島で比較的よくみられる有孔、B2型钁・斧が現時点でみつかっておらず、双合笵で鋳造された資料もない。

B2型钁・斧は近年の研究で朝鮮半島独自の資料として注目されているが（村上2008、金想民2012）、建平喀左喇沁河東の事例のように遼西地域にもあるため、潜在的には燕が持っていた技術から生まれうる。現時点では、平面形態は遼西地域から朝鮮半島北部の清川江流域で共通性があり、銎端部の隆帯の形態は清川江流域から朝鮮半島南部の湖西・湖南地方で共通性がある。また、個々の資料の時期認定については、賛同できない部分もあるが、金想民（2012）は、湖南・湖西地方で副葬されるB2型钁・斧を粘土帯土器文化Ⅲ期後半でも新しい段階から出現すると推定しており、この点については、この種の钁・斧の形成が戦国晩期から下ると考える本稿と矛盾しない。問題はどこで製作されたかであるが、完全に一致する資料はないものの、钁・斧の多様性から考えて、遼東地域から清川江流域までの複数の工房のどこかで製作されたと理解しておきたい。B2型钁・斧のある寧辺細竹里で出土した鎌も、燕の典型的な鎌であるA型ではなく、漢代にみられるB型の形態に近いため、やはり、時期が下ることを支持している。

遼東地域山部から清川江流域に広がるという蓮花堡・細竹里類型という概念については、燕国鉄器からはずれた燕系鉄器が含まれる地域という点では肯定できるが、それらが文化的に同

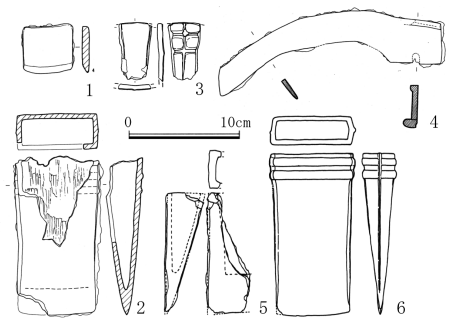
一（李スンジン・他1973）であるかについては疑問である。蓮花堡・細竹里類型に属した青銅短剣をもつ複数の異民族が自由に鉄器製作を行っていたとみなせるほど、燕国鉄器の規範は崩れていないことから、遼東地域の燕の鉄器工房の拡大に伴う変化によって多少変質した鉄器が、この地域に流通したと考えるほうが妥当である。より変質する漢代の資料については、鉄器の普及というよりは、前述したように前漢早期の鉄管理の緩和による私営工房化が関係すると推定される。つまり、蓮花堡・細竹里類型を構成する要素として重要視される鉄器は、近接して鉄器を入手しうる地域である遼東地域或いはそこから清川江流域を含む範囲に置かれた燕の鉄器工房の内容を反映したものに過ぎない。もちろん、燕の工房が後に私営工房化した際は、より異民族の嗜好にあった文物を求められるようになったのは確かであり、この時点でいくつかの工房が異民族に取り込まれた可能性も十分にある。それが夫余や高句麗の鉄器につながるのだろう。

ところで、文献資料に記載された燕の動向と鉄器製作はどのように関連するのであろうか。まず、『史記』匈奴列伝と『三国史』魏書馬韓伝に記されている秦開の活躍時期は、戦国晩期でも早い段階であり、遼東郡設置と朝鮮半島までの版図拡大がこの時期に行われている。遼東地域に燕の鉄器や明刀銭が出土するのもこの時期である。その後、燕は、秦の侵攻により紀元前226年に燕山南部地域を放棄し、遼東地域に逃れ、紀元前222年に滅亡する。この遼東地域が中心となる時期には、燕山南部から遼西地域の拠点は使えないため、遼東地域で鉄器生産をせざるをえなくなったと推定される。もちろん、戦国晩期の早い段階から有孔鉄斧などの燕系鉄器の萌芽はみられるため、紀元前222年以降に遼東地域の全ての鉄器が生産されたとは考え難く、遼東郡を設置した段階から、鉱山を探し、鉄器生産を始め、周辺の異民族と交易を行っていたと理解するほうが妥当である。問題は朝鮮半島南部に鉄器が流通する段階であるが、現時点で戦国晩期の早い段階に遡る証拠はない。粘土帯土器文化期Ⅲ期後半を、青銅器の組成からさらに1段階、2段階に区分するならば、鉄器はⅢ期後半1段階からⅣ期まで湖南・湖西地方に流通する。2段階の長水南陽里4号墓などの時点でB2型钁・斧が出現しているので、遼西地域や遼東地域を参考すると、これが戦国時代晩期を下る秦代にあたる可能性が高い。そのため、Ⅲ期1段階は戦国時代晩期の新しい時期といえるだろう。燕の本拠地が遼東地域になった際、より南との関係が重要になり、朝鮮半島南部の首長層とも交易を始めたとも想像できるが、そこまで完全に文献で記載された動向と一致するかは不明であり、可能性にとどめておきたい。

また、『三国志』魏書馬韓伝に記載では、燕人の衛満が紀元前2世紀初頭に準王を追い出して衛氏朝鮮を建国するが、この際、燕系鉄器の製作工人を引き連れていたことは想像に難くない。この衛氏朝鮮の滅亡時に、嶺南地方などに鉄器製作技術が伝わると理解する研究者は多いが（李南珪2002、孫明助2012）、この際もってこられる钁・斧はB1a型を双合笵で製作するものである（図13-3・10・11）。間接的ではあるが、やはり、燕の領域であった遼東地域から清川江流域でこうした双合笵の製作技術があったことが、推定されよう。

(2)日本列島への拡散と鉄器流通網

最後に鉄器の流通について検討するため、日本列島の資料をみてみよう（図14）。李昌熙（2011）は朝鮮半島の完形品、日本列島の再加工品を集成し、朝鮮半島南部にはA 型钁・斧が少なく、むしろ日本列島で多く分布することを



1. 下稗田 C-5 号住居（前期末～中期初頭）
2. 下稗田 D-406 号貯蔵穴（前期末～中期前半）
3. 貝元 64 号住居（中期前半） 4. 大板井 1 号土坑（須玖 1 新段階） 5. 比恵 SC112（須玖Ⅱ古段階）
6. 比恵 SK201（須玖Ⅱ古段階）

図 14　日本列島の初期鉄器

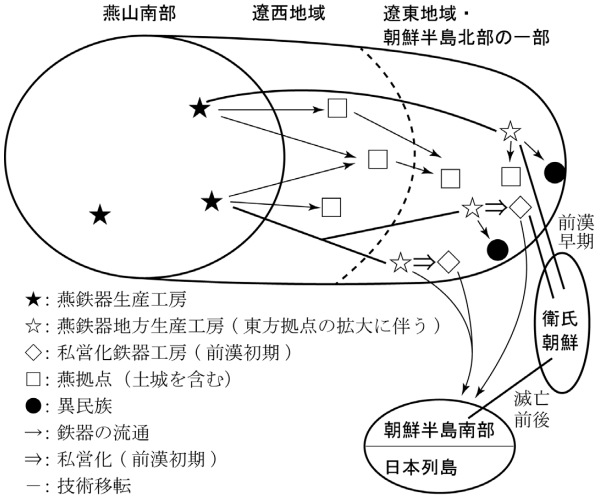


図 15　燕領域内の鉄器流通と生産工房

指摘している。日本列島の資料は再加工品であるため、舶載時のものではない可能性も多分に含まれているが、朝鮮半島南部のA型钁・斧の出現は粘土帯土器文化Ⅳ期であり、B型钁・斧が多数出現した時期よりも遅れると同時に、東部の嶺南地方でのみ流通している。

そこで、日本列島のA 型钁・斧の時期を確認してみると、福岡平野の比恵遺跡では、須玖Ⅱ古段階にA型钁・斧が出土している。この資料は白井克也（1996）によって楽浪郡成立以前の衛氏朝鮮の鉄器であると推定された。小郡市大板井遺跡では、須玖Ⅰ式新段階の縁のある鋳造鉄鎌が出土しており、燕に系譜をもつ鎌であるとされる（笹田2012）。ただし、時期は弥生時代中期前半であるので、比恵遺跡の钁・斧に近い時期であり、燕滅亡後で楽浪郡成立以前である。また、貝元遺跡64号住居出土例のようなA型钁・斧の再加工品も多くが弥生時代中期前半以降であることから、朝鮮半島南部の嶺南地方から日本列島でA型钁・斧が流通した時期は、燕に併行する時期ではなく、漢代であるといえるだろう。さらに、A型钁・斧は漢の工房ではほぼ製作されていない型式であるので、前漢早期の遼東地域の私営鉄器工房か、白井克也（1996）が指摘する燕の系譜を引く衛氏朝鮮の鉄器に求めうる。

ただし、A型钁・斧は大同江流域にはみられず、遼東地域から清川江流域で残存するのみであるため、積極的に衛氏朝鮮の鉄器であるとはいえない。むしろ、衛氏朝鮮が滅亡する時期にA型钁・斧が嶺南地方では出現せず、鋳造の钁・斧は双合笵のB1a型钁とE型のみがみられることから、衛氏朝鮮の鉄器ではない可能性のほうが高い。漢の武帝による鉄官の再管理までに流通していた私営鉄器工房の製品とみたほうがよいかもしれない。

朝鮮半島南部の湖西・湖南地方では嶺南地方と日本列島とは異なるB型钁・斧が中心的であったことから、当時の遼東地域には複数の鉄器製作工房と流通網があったことが推定される。また、衛氏朝鮮の出現時期に該当する粘土帯土器文化Ⅳ期には、湖西・湖南地方の鉄器流通が止まることから、こちらに流れる鉄器については、衛氏朝鮮が阻害しえた地域、あるいは流通網であったのだろう。

以上の検討から、燕の鉄器は遼東地域に入って、燕系鉄器を生み、燕の末期から滅亡後のしばらくの間、朝鮮半島南部から日本列島まで流通したことが判明した（図15）。そして、この鉄器の流通は、型式的な偏差があるため、単純

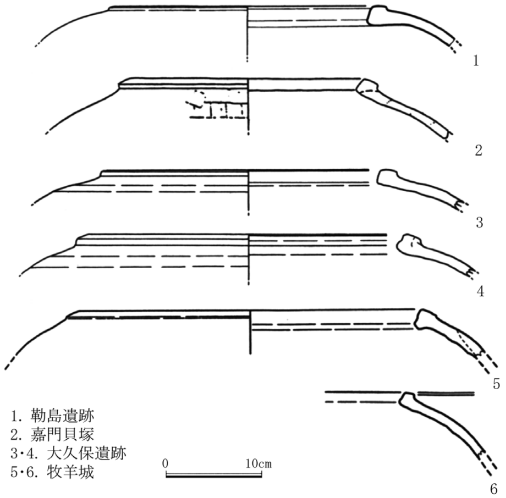


図 16　前漢早期頃の大型無頸壺（長友 2010）

に遼東地域から朝鮮半島を経由し、日本列島へというようなものではなく、遼東地域から清川江流域までの複数の鉄器製作工房で生産された鉄器が、それぞれの流通網を通じて拡散したようである。また、土器に関していえば、前漢早期から中期頃の遼東半島でみられる滑石が多く混じる胎土をもつ無頸壺が、嶺南地方南端の勒島遺跡、沖縄本島の複数の遺跡で確認されている（図16、鄭2008、長友2010）。土器だけでなく鉄器も動いた可能性があり、遼東半島で多く確認される钁･斧の破損品が日本列島まで流通したという見解もある（石川・小林2012）。もちろん、その可能性は十分にあるが、遼東半島には日本列島で出土するA型钁･斧がない点は注意される。ルートとして遼東半島を介したかもしれないが、少なくとも遼東内陸部からの鉄器も流通していたと考えるのが妥当であろう。

『漢書』朝鮮列伝には、衛氏朝鮮が朝鮮半島南部諸政体の漢への朝貢を塞いだという記述があるが、このように発達していた流通網を介して遼東地域が周辺諸政体と交易していた状況があったのである。これを背景として考えるならば、武帝が交易を阻害する衛氏朝鮮を攻め滅ぼしたことも理解しやすくなるといえよう。

註

1) 近年報告された朝陽袁台子では直口鍤が出土した灰坑や、又鍬と銎鏟が出土した窖穴の年代を戦国晩期としているが、共伴する土器が臨沂白庄の前漢早期の筒形瓮と同型式であるため、漢代まで下ることは確実である。

2) 興隆副将溝遺跡はこれまで興隆寿王墳遺跡として記載されることが多かったが、これは誤った名称であることが指摘されている（村上 2011a）。そして、興隆副将溝で盛んな鉄器生産がみられる理由としては、平原に位置する燕下都では原料と燃料の調達に難があり、鉄器生産に限界があったため、燕山に位置する興隆副将溝がより主導的な役割を果たしたという見解が提示されている（村上 2008）。確かに、漢代の鉄器生産、採鉱遺跡が燕山及びその南麓に分布していることから、資源が豊富であったことがわかる。しかし、趙の邯鄲の工房、中山国の工房も燕下都と同様な地理的環境にある。燕上都が現在の北京市及びその近郊に位置していたと推定されることや、燕が東北地方への拡大を行っていたことを考慮すると、資源や燃料の豊富さだけではなく、東北地方への主要交通路であることが重要視されたと推定されよう。

3) 中国歴史博物館所蔵の錫斧は興隆副将溝の資料を用いて鋳造された（華覚明1999、p341の図9-4）。

4) 前漢早期の泌陽下河湾冶鉄遺跡では複合笵になりうる钁･斧笵が出土しているが、上半部が欠損しているため、B1a型かA型かは判別できない。また、中子の模である可能性もあり、その場合は複合笵でもよい。本稿では、登封陽城鋳鉄遺跡の事例を参考にして、湯口がなく、銎部側が解放された钁･斧笵に類する資料については、中子模とする。

5) 遼東内陸部では詳細は報告されていないが、遼陽博物館や鞍山博物館などで、双合笵で鋳造された可能性のあるB1型钁･斧が散見される。

引用・参考文献

石川岳彦2007「「牧羊城二・三類土器」における戦国時代土器」『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室

石川岳彦・小林青樹2012「春秋戦国期の燕国における初期鉄器と東方への拡散」『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集.

石川岳彦2012「燕下都遺跡における鉄器文化の性格」『東アジア古代鉄器文化研究学術フォーラム』国立文化財

研究所
小郡市教育員会1981『大板井遺跡Ⅰ』
川越哲志1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
金一圭2007「最近の調査成果から見た韓国鉄文化の展開」『第1回東アジア鉄文化研究会資料集』
笹田孝朋2007『牧羊城出土の鉄器』『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室
笹田孝朋2012「日本で現れる中国と韓半島鉄器文化の性格と展開様相」『東アジア古代鉄器文化研究学術フォーラム』国立文化財研究所
潮見浩1982『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館
高久健二1992「韓国出土鉄矛の伝播過程に対する研究」『考古歴史学志』第8巻　東亜大学校博物館
鄭白雲1960「朝鮮における鉄器使用の開始」『朝鮮学報』第17集
東亜考古学会1929『高麗寨』
東亜考古学会1931『牧羊城』
東亜考古学会1931『南山裡』
長友朋子2010「楽浪土器からみた交流関係」『待兼山考古学論叢』大阪大学考古学研究室
中村大介2010「粘土帯土器文化期から原三国時代の社会と副葬習俗の変化」『考古学研究』57-1　考古学研究会
中村大介2012「楽浪郡成立前後の国際関係」『交響する古代Ⅱ』明治大学日本古代学教育･研究センター
下稗田遺跡調査指導員会1985『豊前下稗田遺跡』
福岡市教育委員会1996『比恵遺跡21』
福岡県教育員会1998『貝元遺跡Ⅰ』
福岡県教育員会1999『貝元遺跡Ⅱ』
藤田等1974「鉄器の出現は何を物語っているのか」『日本考古学の視点』上　日本書籍
志摩町教育員会1983『御床松原遺跡』
三宅俊成1933『大嶺屯城址』満州文化協会
宮本一夫2000『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店
宮本一夫2009「考古学から見た扶余と沃沮」『国立歴史民族博物館研究報告』、第151集
宮里修2011「東北アジアの青銅器と初期鉄器」『戦国燕系鉄器の特質と韓半島の初期鉄器文化』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター第4回国際シンポジウム
村上恭通1988「東アジアの二種の鋳造鉄斧をめぐって」『たたら研究』第29号
村上恭通1998『鉄と倭人の考古学』青木書店
村上恭通 2008「東アジアにおける鉄器の起源」『東アジア青銅器の系譜』新弥生時代のはじまり第3巻 雄山閣
村上恭通2011a「中国における燕国鉄器の特質と周辺地域への展開」『戦国燕系鉄器の特質と韓半島の初期鉄器文化』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター第4回国際シンポジウム
村上恭通2011b「東アジア周辺域の鉄器文化」『弥生時代の考古学』4　同成社

【中文】

王巍1997「中国古代鉄器及冶鉄術対朝鮮半島的伝播」『考古学報』1997-3
王増新1964「遼寧撫順市蓮花堡遺址発掘簡報」『考古』1964-6
華覚明1999『中国古代金属技術』大象出版社
河南省文物研究所1991「南陽北関瓦房庄漢代冶鉄遺址発掘報告」『華夏考古』1991-1
河南省文物考古研究所2009「河南泌陽県下河湾冶鉄遺址調査報告」『華夏考古』2009-4
河北省文物管理処1975「河北易県燕下都44号墓発掘報告」『考古』1975-4
河北省文物研究所1996『燕下都』文物出版社
魏海波・梁志龍1998「遼寧本溪県上堡青銅短剣墓」『文物』1998-6
鶴壁市文物工作隊1994『鶴壁鹿楼冶鉄遺址』中州古籍出版社
吉林省文物工作隊・吉林市博物館1982「吉林樺甸西荒山屯青銅短剣墓」『東北考古与歴史』1982-1
吉林省文物考古研究所2008『田野考古集粋』文物出版社
許玉林・遼寧省博物館1980「遼寧寛甸発現戦国時期燕国的明刀銭和鉄農具」『遼海文物学刊』1980-2
敖漢旗文化館1976「敖漢旗老虎山遺址出土秦代鉄権和戦国鉄器」『考古』1976-5
山東省博物館1977「山東省莱蕪県西漢農具鉄笵」『文物』1977-7
朱永剛1988「吉林省梨樹県二龍湖古城址調査簡報」『考古』1988-6
肖景全2010「新賓汪清門鎮龍頭山石蓋墓」『遼寧考古文集』2
新郷市文管会・輝県市博物館1996「河南輝県市古共城戦国鋳鉄遺址発掘簡報」『考古』1996-1
陝西省考古研究所華倉考古隊1983「韓城芝川鎮漢代冶鉄遺址調査簡報」『考古与文物』1983-4
張喜栄1997「台安白城子戦国遺址出土器物簡介」『遼海文物学刊』1997-1
陳振中2008『先秦手工業史』福建人民出版社
馮泳謙・崔玉寛2010「鳳城劉家堡子西漢遺址発掘報告」『遼寧考古文集』2
苗麗英1997「本溪怪石洞発現青銅時代及漢代遺物」『遼海文物学刊』1997-1
臨沂市博物館1988「臨沂的西漢瓮棺、磚棺、石棺墓」『文物』1988-10

鄭紹宗1956「熱河興隆発現的戦国生産工具鋳笵」『考古通訊』1956 -1
鉄嶺市文物管理弁公室1996「遼寧鉄嶺市邱台遺址試掘簡報」『考古』1996-2
白雲翔2005『先秦両漢鉄器的考古学研究』科学出版社
裴輝軍1989「遼寧昌図県発現戦国、漢代青銅器及鉄器」『考古』1989-4
李京華・陳長山『南陽漢代冶鉄』中州古籍出版社
李京華2007『中国古代鉄器芸術』北京燕山出版社
梁志龍2003「遼寧本渓多年的石棺墓及其遺物」『北方文物』2003-1
遼寧省博物館・許玉林1977「遼寧寛甸発現戦国時期燕国敵明刀銭和農具」『文物資料総刊』3
遼寧省文物考古研究所1996「遼寧凌源安杖子古城址発掘報告」『考古学報』1996-2
遼寧省博物館文物工作隊・朝陽地区博物館文物組1983「遼寧建平県喀喇沁河東遺址試掘簡報」『考古』1983-11
遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館2010『朝陽袁台子』
劉謙1955「錦州市大泥窪遺址調査記」『考古通訊』1955-4
吉林大学考古学系1997「遼寧省錦西市台州屯小荒地秦漢古城址試掘簡報」『考古学集刊』11
東北博物館1957「遼陽三道壕西漢村落遺址」『考古学報』1957-1
鞍山市岫岩満族博物館2009「遼寧岫岩城南遺址」『北方文物』2009-2

【朝・韓文】

円光大学校馬韓・百濟文化研究所2005『益山信洞里』
韓国文化財保護財団1998『慶山林堂遺跡』Ⅰ～Ⅵ
京畿文化財研究院2009『加平大成里遺跡』
京畿文化財研究院2009『安山萬井里シンギ遺跡』
金一圭2012「韓半島中部地域鉄器文化の性格と展開様相」『東アジア古代鉄器文化研究学術フォーラム』国立文化財研究所
金想民2009「韓半島鋳造鉄斧の展開様相に対する考察」『湖西考古学』20.
金想民2012「韓半島西南部地域における鉄器文化の流入と展開様相」『東アジア古代鉄器文化研究学術フォーラム』国立文化財研究所
慶尚北道文化財研究院2008『大邱月城洞777-2番地遺蹟(Ⅱ)』.
国立慶州博物館2007『永川龍田里遺跡』
国立文化財研究所2011『韓・中鉄器資料集Ⅰ』
湖南文化財研究院2005『完州葛洞遺蹟』.
湖南文化財研究院2009『完州葛洞遺跡Ⅱ』
全北大学校博物館2000『南陽里』
孫明助2012『韓国古代鉄器文化研究』ジニンジン
池健吉1990「長水南陽里出土青銅器・鉄器器一括遺物」『考古学誌』2.
中央文化財研究院2001『論山院北里遺跡』.
鄭仁盛2008「瓦質土器楽浪影響説の検討」『嶺南考古学』47号　嶺南考古学会
李健茂1990「扶餘合松里遺蹟出土一括遺物」『考古学誌』2
李健茂1991「唐津素素里遺蹟出土一括遺物」『考古学誌』3
李昌熙2011「韓半島初期鉄器の実年代」『韓国における鉄生産』たたら研究会平成23年度北九州大会
李スンジン・張ジュヒョプ1973『古朝鮮問題研究』社会科学院考古学研究所
李南珪2002「韓半島初期鉄器文化の流入様相」『韓国上古史学報』第36号韓国上古史学会
嶺南文化財研究院2000『大邱八達洞遺蹟Ⅰ』